

# 呉 趼 人 伝 略 稿

中 島 利 郎

## 1. はじめに

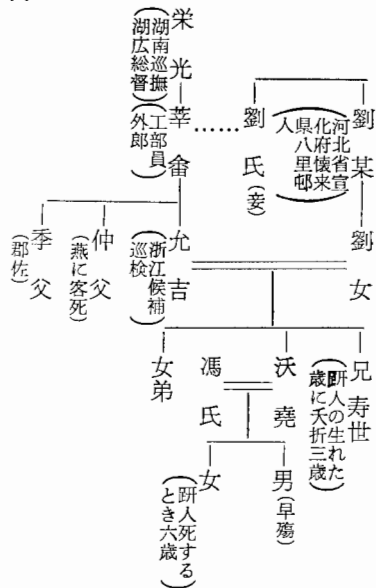
我仏山人の筆名で著名な清末の代表的小説家呉趼人は、清末の他の小説家たちと同様にその来歴及び創作活動についてはあまり知られず、またそれらを考察するに足る資料も、今日十分に知見でき得る状態にはない。そのような中で、李葭棠<sup>1)</sup>の「小説家呉趼人伝」は、呉趼人の来歴及びその為人を窺わせるに足る現見唯一ともいえる稍やまとまった伝記で、我々に貴重な資料を提供してくれる。李氏のこの伝記は、阿英の『晚清小説史』に拠れば、初め『天鐸報』<sup>2)</sup>という新聞に掲載されたというが、該報は既に稀覯に属し、いまでは『清朝野史大観』(巻11)や、『清代軼聞』などの輯佚書により窺うばかりである。<sup>3)</sup>このほかにも孔另境輯録の『中国小説史料』に収められた、周桂笙の「新菴筆記」<sup>4)</sup>や魏如晦(阿英)の「清末四大小説家」などに、呉趼人の来歴に関連する記事が見えるが、いずれも断片的に彼の行動を伝えるにすぎない。本稿の目的は、以上の基本的資料のほかに、他書に散見する関連資料、並びに先学の研究成果を加えて、呉趼人の伝記をでき得る限り明らかにしていくことにある。だが、以上の如くその資料は極めて限られており、それらすべてを総合しても、彼の経歴の空白部分はあまりにも大きく、自らの非力と相俟って、極めて概略をなぞるにとどまること、ここにお断りしておく。

## 2. 出生および家系

呉研人は実名を沃堯，字は小允，また蘭人ともいったが，事情があって（後述），のちに研人と改めた。それが筆名の我仏山人とともに通り名となった。<sup>5)</sup> 広東省南海県の人といわれる。1866年（同治5）の生まれである。<sup>6)</sup> 彼の友人李葭棠の書き残した「小説家呉研人伝」（以下「研人伝」と略記する）に拠れば，父は浙江候補巡検・呉允吉，祖父は工部員外郎・呉莘畚，母は宣化府懷来県の劉氏で，祖父莘畚の妾劉氏の兄弟劉某の娘，<sup>7)</sup>そして曾祖父は，嘉慶・道光期の高官で湖南巡撫兼湖広総督に至った呉栄光であるといわれる。以上の家系を図をもって示せば〔図1〕のようになる。（尚，後の記述とも関連するので上に挙げた以外の一族も「研人伝」等の記載に基づき補った。）呉栄光（1773～1843）とは，字を伯栄，号を荷屋・白雲山人などといい，嘉慶4年（1799）の進士である。官は翰林院より河南道監察御史，刑部江西司員外郎，貴州布政使などを歴任し，湖南巡撫兼湖広総督に至った。一方，金石掌故の学に精通し，海内より荷屋先生と尊称されるほどの学者であり，また書画詩文にも通じた文人で，『歷代名人年譜』，『白雲山人詩稿』，『吾学録』，『緑伽南館諸集』などの著作をも残している高名な人物であった。その伝は『清史列伝』巻38をはじめ，『国朝耆献類徴』，『清代学者象伝』，『統修南県志』巻13などに詳しい。

以上，研人の曾祖父に至るまでの家系を李氏「研人伝」に基づき記したが，いまここに研人の原籍

図1



ともいわれる、広東南海県仏山についてかなり詳しく記した一書、『仏山忠義郷志』<sup>8)</sup> (以下『仏山志』と略記する) に拠り、いま少し胥人の一族といわれる仏山の呉氏について述べてみる。

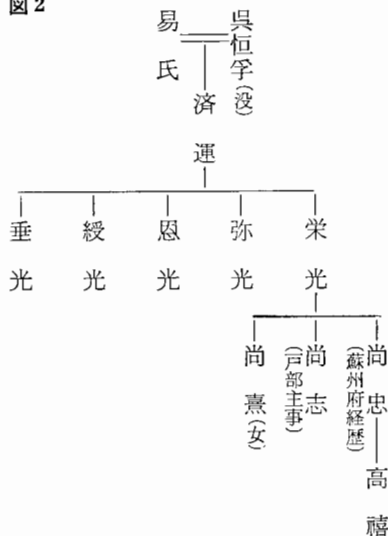
仏山の呉氏は元来江蘇省延陵の出で、明末になり広東南海の仏山に移り住み、以後、仏山では代々官吏を輩出してきた所謂名門世家であった。『仏山志』巻9「氏族」に拠れば、明末には呉如祈(挙人)が某県の知県となっており、清代では呉璋(貢生)が湖広黔陽県知県、呉承愨が戸部江南司郎中、呉承信(貢生)が戸部広西司主事、呉廷招(挙人)が国子監学正、呉樹運が兩浙塩運司経歴、そして嘉慶4年には、先に述べた胥人の曾祖父といわれる呉栄光が、仏山の呉氏としては最初の進士となり、累官して湖南巡撫湖広総督に至っており、また栄光の実弟呉弥光(挙人)は詹事府主簿、族弟の呉林光(進士)は江西省鉛山県知県になるなど、光緒末に至るまで4人の進士、9人の挙人等を出した名族であった。

「胥人伝」および『仏山志』に拠ると、以上に見るように呉胥人は、曾祖父には呉栄光という高名な人物をもつ、仏山の名族呉氏の一員として生まれたことになる。

だが、それについてここで一つの疑問を呈示しておきたい。

〔図2〕は『仏山志』巻15「芸文」に収められた、呉栄光の「五世同堂呈」という一文より、栄光の家系を図によって示したものである。この「呈」は、呉栄光が刑部江西司員外郎在官中の嘉慶20年(1815)に上書したもので、その年自家が五世同堂となったことを報告しているが、その中で自らの家系について次の

図2



——拠嘉慶20年「五世同堂呈」(『仏山忠義郷志』巻15) 作成——

ように記している。

栄光の祖母の易氏は現年八十七歳、…………… 栄光の父は濟運といい、廩貢生候選教諭であります。濟運は栄光以下兄弟五人を生みました。長男は栄光、次男は弥光といい附学生、三男は恩光、四男は綏光、五男は垂光であります。栄光は息子二人を生みました。長男を尚忠、次男を尚志といい、いま嘉慶二十年正月、尚忠が息子の高禧を生み、ここに五世同堂となりました。……………

上の引用で明らかであろうが、〔図2〕よって説明すれば、他の資料より補ったが、祖父である呉恒孚は既に没し、一世にあたる祖母の易氏現年87歳を頭に、二世の父呉濟運、そして三世が栄光以下五人の兄弟、四世には栄光の2人の息子尚忠、尚志（この「呈」には閩秀画家として著名な尚熹の名がみえないが、便宜上他の資料より補った）、五世は尚忠の息子の高禧となる、然るに、この「呈」に拠れば、栄光の子は尚忠、尚志の2人がいるのみで、先の「跂人伝」中において、栄光の息子で跂人の祖父に当る呉華奮の名が記されていない。この「呈」の上書当時、栄光はまだ42歳前後であり、従って華奮はそれ以後の子とも考えられるから、そこで試みに栄光没後に成立した『続脩南海県志』巻13「列伝」中の栄光の伝を見たが、やはり栄光の子としては蘇州府経歴となった尚忠および戸部主事となった尚志の名が記されているばかりで、華奮の名は録されていない。しかし、かりにこの2人の兄弟に次いで生まれているとするならば、当然「尚」の文字を冠する諱になるであろうから（それは尚熹の例でもわかる）、華奮が尚忠、尚志に次する兄弟という可能性は薄くなる。更に華奮が尚忠か尚志の字ではないかとも考えられるが、「跂人伝」が栄光を諱で示し、順次華奮、允吉を紹介していることから、華奮、允吉も当然諱でなければならない。つまり「跂人伝」では繋がるはずの跂人の曾祖父栄光と、祖父華奮が、「五世同堂呈」、「南海県志」で見る限り繋がらないのである。そこで次に『仏山志』中で、呉氏の家系に関連する、巻9「氏族」、巻13「選挙志」、巻14「人物」などについて通覧してみたが、やはり栄光、

尚忠、尚志の名は見い出せても、華奮とその子允吉の名は見出すことができなかった。『仏山志』は民国初期に編纂され、その名の示すように明代より清の光緒末期に至る仏山出身の忠義なる人物、上は進士出身で高官となったものから、下は貢生にもなり得ず低い官職に終わったものまでをも、上記3巻に殆ど網羅している。ゆえに南海仏山を原籍としておれば、高官とはいえずとも、工部員外郎および浙江候補巡検となった華奮・允吉父子を、当然書き漏らすはずはない、と考えられる。

先に「胥人伝」および『仏山志』に拠ると、吳胥人は、曾祖父には吳榮光という高名な人物をもつ、仏山の名族吳氏の一員として生まれたことになることと記したが、またこの両資料の表面的比較に拠ると、以上のように曾祖父榮光と祖父華奮の間に齟齬が認められるのである。いま、独断的想像が許されるのなら、私は、吳華奮は南海県仏山を原籍としてないのではなからうか、つまり彼は何らかの理由があって、仏山の吳氏と関わりをもち得なかった、と疑う必要もあるのではないかと思う<sup>9)</sup>。そして、それが事実ならば、当然孫に当る胥人にも大きな影響を与えたことは想像に難くない。しかし、いま確かに証左も見い出せないので、吳胥人の家系、出自にはなにか不明な点があるのではないか、という疑問を呈示するにとどめる。

### 3. 幼少年期より上海に到るまで

さて、以上に述べたように、吳胥人の家系には不明な点があるのだが、彼の幼少年時代の生活に関しても、まったく資料が欠けており、更に不明である。

「胥人伝」に拠れば、吳胥人は、祖父の華奮が工部員外郎として北京の京邸に居し、また父の允吉も浙江候補巡検として祖父に侍し北京にいた時に、生まれた<sup>10)</sup>とある。当時の吳胥人一家は、上記の祖父、父および母の劉氏と兄が一人いたと、いう（後に妹が生まれている『図1』参照）。兄は名を寿世といい、胥人の記すところに拠れば甚だ聰明な子供であったが、胥人の生まれた年に亡くなっている。

先兄寿世、同治癸亥（1863）の歳に生まれた。やっと三歳になったばかりであるが、日に数十の字を学い覚え、その進退揖讓はまるで成人した男子のようで、故郷の年輩のものは、みな彼を神童と目していたという。丙寅（1866）の歳、私が生まれ、先兄は夭折した。先君子（允吉）は慟哭して、兄を京邸の広東義園（共同墓地）に葬った。おりしも南方に帰ることになったので、そこで碣を先兄の墓の側に立てて目印とした……

（「都中、先兄の墓を尋ねるも得ず」序<sup>11</sup>）

「おりしも南方に帰ることになったの」は、兄寿世の死に続き、祖父華畚が官途に没し、父允吉が服喪のために郷里に帰るためであった。祖父の死は兄に遅れること2・3年であろう。時に趼人は未だ「襦袢にくるまり、数歳であった」（『趼人伝』）という。「趼人伝」の記すところに拠れば、祖父華畚の喪があげて後、允吉は始めて浙中に巡検の職を得たらしい。祖父没して後の趼人一家の生活がどのようなものであったかは、いま知見し得る資料にまったくその言及がなく皆目わからないが、変化を記す資料が見当たらないことからすれば、父が職にあった生前は、生活は豊かではないかもしれないがさして悪くはなかったと思われる。

しかし、変化は趼人17歳の時に起る。

光緒壬午（1882）八月、先君の手紙を得る。寧波に赴き病を見舞うように書いてあった。時に私は17歳になったばかりである。

（『趼塵筆記』中「神籤」<sup>12</sup>）

父は寧波に任官し、上記のように病に倒れたが、まもなく後事を自分の末弟に託して、祖父同様官途に没してしまう。しかし、この季父はたいへん薄情な人物で、趼人一家にも相当の迷惑をかけたらしく、この時より後に残された母と妹とを抱えた趼人の労苦がはじまった。そして一家を支えるため種々の職業につき、一般社会のさまざまな現状を見ながら自活の技を身につけていったのであろう。李霞栄は「趼人伝」中にいう。

彼は才芸に富み、金石篆刻のことより、江湖食力の技に至るまで、できないこともなくまた知らないこともなかった。

しかし、彼はそのように一般社会の中で自活の技を身につけながらも、けっして卑屈にならなかった。同じく李霞棠はいう。

君は早歳にして貧窮の身となったが、他人とは異なり侵し難いところがあり、困窮した様子や卑屈な様子はなかった。

君は生まれつき生気を負い、刺激あらばすなわち憤る。肉親の面倒をよくみ、友人には親愛をもつてのぞんだ。

魯迅は呉趼人を評して「性強毅にして、人に下るを欲せず」<sup>13)</sup> といい、韋庵は「その性格は剛毅で挙止は豪放であった」<sup>14)</sup> といい、そして李霞棠は上記のように「他人とは異なり侵し難いところがある」、「生まれつき生気を負い」というように、趼人の性格は、些か他人とは相入れぬ傲岸不遜な点があったようである。宋儒の学、殊に朱子学を頑ななまでに憎み、天下の士が競って栄利を求めて科挙に赴く時、彼は一貫して終生八股の文章を拒否し続け遂には不遇に終わってしまうのだが、そのような態度にも彼の性格は色濃く出ている。しかし、その反面、肉親等の面倒をよくみ、また友人を心より大切にしたり、どのように優しい思いやりの情も合わせもっていた。既に故郷を離れ出て、上海の江南製造軍械局の筆耕となった時のことであるが、そのような彼の性格を窺わせるに足るような話が伝わっている。

仲父が燕（北京）に客死したので、電報で季父（前述の父允吉が後事を託した人物）に指示を仰いだ。三たび連絡したが返事がない。一月程して返事が届いたが、それには、私たちは兄弟とはいえ、財産を分かち、世帯を分離したからには、既に関わり知らぬこと、とあった。君は大いに憂い悲しみ、製造軍械局に喪を乞い、会計より数ヶ月分の賃金を前借りし、旅

じたくを整え北に向けて立った。北京に着いてみれば、仲父の側女たちはみな家財を持って逃げ去った後で、ただ二人の子供たちが哀れにも残り残されていた。君はとても悲しんで、彼らを救い、一緒に南へ連れ帰って来た。<sup>15)</sup>

そのような二面をもちつつ、困窮した状態の中で、力を尽して母を養い、妹を他家に嫁し、また自らも妻を娶り子をもうけるのだが、また生活に追われてか、26才頃には上海に出て、江南製造軍械局に職を求めることになる。

#### 4. 執筆活動

趼人がはじめて筆を手にしたのは、20歳の頃である。それはたまたま古書肆で手に入れた明の帰有光(字、熙甫)の文集を愛読し、ついに読むだけでは事足りなくなり、古文に力を尽すようになる。趼人が古文に興味を示したのは、おそらく八股功令への反駁からであろう。寝食を忘れた3年間の練磨辛苦の結果、文章は長足の進歩をとげたが、とりわけ小説家の文章を好むようになった、といわれる。<sup>16)</sup>

しかし、趼人が本格的に文章を書き、発表しはじめたのは25・6歳の頃、上海の江南製造軍械局へ筆耕として就職してからのことである。その頃彼は最初「蘭人」の筆名を使い、後に「趼人」と改め、<sup>17)</sup> 上海の各新聞に短文を発表している。<sup>18)</sup> だが、新聞への短文発表のみでは当然生活も成りたらず、未だ創作活動は江南製造軍械局勤側の余技の域を出なかった。けれども、この頃より文名なる10年程の間の大都会上海での生活経験は、趼人にとって大きな文学修業となったはずである。後年、文名を為した『二十年目睹之怪現狀』の実際の見聞や経験に基づく広範な描写や、30種にのぼる小説、そして寓言・笑話・花柳界見聞記・詩作等の多彩な執筆活動は、上海でのいくたの見聞や経験から成りたっている、<sup>19)</sup> からである。また、上海での生活は趼人に、半殖民地化されていく弱体中国の現状を認識させ、そして、その弱体を招い



た腐敗官吏の横行や、そのような弱体の中にあっても何も知らず「茶をすすりながら、逆賊平定の武雄談に聞きいる」蒙昧な民衆たちの存在を教えた。そして、この民衆に対する開智を通じての中国復活が、跼人の心の中にめばえるようになる。

1902年（光緒28、跼人36歳）10月、梁啓超が日本の横浜において『新小説』を創刊し、その創刊号誌上に「小説と群治の関係を論ず」の一文を発表する。

一国の人民を新たにしようとするならば、一国の小説を新たにしなければならない。故に道徳を新たにしようとするならば、必ず小説を新たにしなければならない。宗教を新たにしようとするならば、必ず小説を新たにしなければならない。政治を新たにしようとするならば、必ず小説を新たにしなければならない。風俗を新たにしようとするならば、必ず小説を新たにしなければならない。学芸を新たにしようとするならば、必ず小説を新たにしなければならない。果ては人心を新たにし、人格を新たにしようとするにも、必ず小説を新たにしなければならない。なにゆえかといえ、小説には不可思議な力があって人の心を支配するからである。

この改良派梁啓超の小説の効用による人民および中国社会への開智論は、跼人に大いなる同調と、半殖民地化し亡国の危機に晒されている中国に対して、希望ある未来への道を夢想させることになった。そこで彼は、この梁啓超の影響のもとに、まず蒙昧な人民への開智の方法を模索する。

私は学問が狭いため、常日頃無学な人々を助けようと思いつつも良い方法が見い出せなかった。小机にもたれ仮寝していると、窓の外に人の声が出た。聞いてみるとかごかきが二人、三国志について談じている。こじつけや荒唐無稽な話が半ば以上であったが、史実もまた三・四割は含まれていた。私は、はっと思って立ち上り、これこそ良法だ！これが演義の効用だと悟った。小説家の言は、興味深く、人をひきつけて離さないも

のなのだ。<sup>20)</sup>

そして、1903年(光緒29)この方法をもって書かれた作品が趸人にとっては処女作ともいえる『痛史』であった。<sup>21)</sup>『痛史』27回は、部分的には創作をまじえてはいるが、その大半は『宋史』に基づき、多くの歴史上の人物および事跡を踏まえ、それを演義の方法で万人に読まれるように、興味深く描いたものである。

南宋の末、中国は北方の元の攻撃をうけて、まさに亡国の危機に直面する。蒙昧な天子度宗の治下、国内は混乱し、それに乗じた奸臣宰相賈似道が誤国の暴権を奮い、宋朝光復を計る義臣文天祥とすどく対立する。元の侵攻のもと、賈似道を筆頭とする奸臣一味は、売国救済につとめるが、それはまさしく列国侵略のもとに、貪官汚吏、悪徳買弁が奸計を労して横行する清末社会の風刺であり、趸人の筆は異民族の中国侵略に対する慷慨とともに、彼らの行動を力をこめて攻撃し、宋朝の光復を文天祥に託している。奸計を労する賈似道は悪玉であり、宋朝光復を計る天祥は善玉である。そのような所謂勧善懲悪の対立構造で物語は進展する。それは歴史物語の中に民衆が希望する永遠不変の論理であり、そのうえにのみ「正史」の演義が成立するからである。そのような通俗演義によって、趸人は当時の中国の危機を民衆に知らしめ、開智への手段にしようと試みた。しかし、その試みは成功したとはいえなかった。後に『月月小説』誌上にも同様な歴史小説「両晋演義」、「雲南野乘」を発表するのだが、この『痛史』をも含めて、それらは必ずしも前述の趸人の意図を満すことができなかつたらしく(趸人自身著作の途次、このような方法をもっての民衆開智に疑問を生じ且つ挫折を感じたのではないかと思われる)、<sup>22)</sup>すべて未完に終わってしまう。

だが、それは後のことで『新小説』に『痛史』発表以来、引き続き『二十年目睹之怪現狀』、『九命奇冤』を合わせて同誌に連載する側、『繡像小説』41期(光緒30.12)～46期(同31.2)に「賭騙奇聞」8回を、また『恨海』(光緒32, 広智書局刊)や『糊塗世界』(光緒32, 上海世界繁華報館刊)などの小説を発表し、「新笑史」、「新笑林広記」(共に『新小説』)などの笑話をも矢継早に掲載し、

次第に名を知られるようになった。

『二十年目睹之怪現狀』108回は、清末20年間の中国社会の百鬼夜行の様子を、胥人自身の見聞、経験に基づき書きつらねた風刺小説の一種で、胥人の文名を一躍高めるに至った。しかし、この小説は実際の体験に基づくだけに、その眼を覆わんばかりの中国の惨状は、胥人に民衆開智、中国光復の希望を頓挫させ、逆に厭世観をもたらしたといわれる（それは『痛史』等の未完にもつながると思う）。李氏「胥人伝」にいう

『怪現狀』はおそらく生涯を回顧した作品であって、基づくところが明らかなので、読者を感動させる。真相虚偽を描いて、なお事実に鑑み、また体験を写している。彼の厭世思想はおそらくそこに芽生えたのであろう。私がかつてこの点を質したところ、彼は「あなたは私を知っている」といった。しかし、救世の情尽きて厭世の思いが生じたことは、理由のないことではない。

1903年『痛史』発表前後に、民衆開智、中国光復にむけて執筆ととりくんだ胥人は、1906年（光緒32）の『二十年目睹之怪現狀』完成の頃には（僅か3年後）、既にそれらに希望を失う芽を宿していたことになる。この点については、ある意味で彼を批難すべきであろう。

『糊塗世界』12回も『怪現狀』と同主旨で書かれた作品。

『九命奇冤』36回、「瞎騙奇聞」8回は、中国在来の迷信の不合理、恐ろしさを描いた作品で、これも開智小説の一種であるといってよい。ことに前者は、風水という中国古来の非科学的迷信がいかに人を損うものかを、中国伝統の公案小説の体をかりて告発している。

『恨海』10回は、庚子事変による社会の混乱の中での男女の悲歡離合を描いたもの。

「新笑史」、「新笑林広記」は、文字通り笑い話であり、「性強毅にして、人に下るを欲せ」ざる胥人の別の一面をのぞかせている。朝庵に拠れば、胥人は平生よりユーモアを好み、閑談するによく冗談を雑え、ために友人会合

の場に彼が来れば、その場の雰囲気は陽気になって、彼の一言一言にみな腹を抱えて笑った、とあり、また趼人自身も、笑話とは社会生活の中で重要な働きを持つと考えて、従来の低俗な笑話を、題を現実に求め、事実に基づいた笑話として改良を試みたという。<sup>23)</sup> つまり、これもやはり小説と同様、目指すところは風刺であり、民衆開智であった。

1904年、趼人は知名のゆえをもってか、漢口の『楚報』<sup>24)</sup>の主編者としてむかえられる。しかし、その年従来米国内でくすぶり続けていた反華工禁約運動<sup>25)</sup>が、中国国内においても米国製品ボイコットという型で爆発して、全国的な反米運動となった。この運動の結果は、中国政府の軟弱な態度と、運動組織自体の意見の相異、そして漢奸の暗躍により失敗してしまうのではあるが、趼人はこの運動に、中国の未来には希望があると見たのだろう、『楚報』が米人経営だったことを理由にすぐさま職を辞し、甚だ熱心にその運動に参加する。当時、吳趼人がこの運動の指導者曾少卿にあてた手紙は、彼がいかに熱心にこの運動に関心をもっていただかを示している。

私が今度漢口の『楚報』を辞めて帰ったのは、ボイコットを実行するためです。上海に帰って後、各波止場の勇躍たる状況を調査しましたが、感激に堪えません。然るにあなたの提唱力によらなければ、事はここに至りません。……私は各波止場の同志に布告し、今度のボイコットの状況を白話文で説明し、この事が在華米国人とまったく関係のないことを表明すべきだと、密かに思っています。もし米国人に出会ったならば、格別の応待をして、我が中国の度量の大きいことを示すべきです。しかし、その製品は用いず、雇用は受けず、禁工の条約に抗するのみです。……我が中国の商業界の資本には万全の処置を講じなくてははいけません。まさに一大集会を催し、各商人を結集し、以前にとり決めた米国製品を調査し、個別に商業連合会を通じて登録し、更に現存の米国製品を調査して、また個別に登録する。……<sup>26)</sup>

以上のように、この運動に対する趼人の熱心な様子がわかる。ためにこの

運動が失敗に帰した時の彼の気持は察するに難くない。後年、米国の国防大臣が上海に来た折、当地の紳士、商人が大歓迎会を催したので、彼は大いに激怒して「人鏡学社鬼哭伝」(『月月小説』10号, 1907) を書いた。それは、この運動の当初、人鏡学社社員馮夏威が、運動のたち消えを恐れて自殺をもって同志を励ましたことがあり、その悲しみを既に忘れ、笑顔で米人を歓迎している紳商に対する憤りであった。この運動の失敗およびその後のこのような出来事を通じて胥人の、中国救い難し、との絶望感と厭世感は深まっていったのであろう。尚、この運動を題材にした作品としては『劫余灰』16回(『月月小説』10号～2年12期)がある。また、この運動の後か、日本に遊んだことがあるといわれるが詳細は不明である。<sup>27)</sup>

1906年(光緒32)、胥人は再び上海に帰った。時に休寧の汪維甫が「風俗の改良」を企図とし『月月小説』を創刊しようとしており、胥人を著述主編に、胥人の20年来の友人周桂笙を訳述主編にむかえた。そして再び、胥人はこの雑誌を舞台に「兩晋演義」、「雲南野乘」、「發財秘訣」、「上海遊驂録」、「劫余灰」等の小説と、数十種の短篇創作、雑文類を発表する。しかし、上記の運動の失敗などにより挫折をあげ、次第に厭世観の増す身では、『新小説』掲載当時の覇気ある作品は発表し得なかった。見るべきものは「兩晋演義」と「劫余灰」のみである。1907年(光緒33)『月月小説』に発表された『上海遊驂録』には次のようにいう。

私は以前公益事業に熱心で、終日奔走して暇もなかった。後になりよく考えてみると、社会とはまことに不可思議なもので、言葉ではいい尽すことはできず、どのような人物であろうとも、結局はうまくやっっていけないのである。およそ何か公益事業を起そうと建議すれば、必ずや無数の阻止力が内に生じて、その結果、熱情も麻痺してしまい、それまでになってしまう。私はこのような事実を多く見て、にわかに厭世感にとりつかれたのである。

1908年(光緒34)、『月月小説』は停刊となる。それに前後して胥人は、当

時の広東人の上海での宿泊所「広肇公所」の経営が、あまりにも公所理事たちの恣になっているのを憤り、同省人盧傑、郭翔、李葭棠等で新たな宿泊所「両広同郷会」を武昌路につくり、また丹徒の杜純を教務に招き、そこに併設した広志両等小学堂の経営に力をいれる。<sup>28)</sup>しかし、経営も軌道に乗らぬ2年後の1910年(宣統2)の秋、『近十年来之怪現状』および『情交』を遺作に、妻馮氏と6歳になる娘を残して、上海に客死した。死亡した時には、僅かに小銀元二角がポケットにあったのみといわれる。

その墓は上海広肇山荘にあり、一時不明となったが、また近年発見されたという。<sup>29)</sup>

### 註

- 1) 李葭棠については詳細はわからないが、広東省高州府信宜県(現在の広州の西南250km)の人で李懷霜ともいう。呉趼人が上海にて両広同郷会(上海に於ける広東人の会館)を創立する折、その設置に協力した友人の1人である。『東方雜誌』に「周封大夫墓志銘」が見える。
- 2) 戈公振の『中国報学史』に拠れば、上海発行の日刊紙で「民族主義を提唱し、排満を鼓吹した」新聞といわれる。
- 3) このほかにも『小説世界』第13巻第20期(未見)や范烟橋『中国小説史』(抄録)に輯佚されている。
- 4) 周桂笙の「新菴筆記」は呉趼人に限らず、いま見得る断片記事からも、清末の作家研究に欠かせない一書と思われるが、現在その所蔵については残念ながら不明である。周桂笙とは、呉趼人が休寧の汪維甫に『月月小説』の創作主筆として招聘されたとき、同時に翻訳主筆として招聘された人物で、新菴、知室主人などの筆名で、同誌を中心に虚無党小説や偵探小説を多数訳載した。楊世驥「晚清文学史話」(説文月刊2—2, 1940. 5)に拠れば、上海に子息の周壬林がいて、清末文学に関する資料を多数所蔵していたという。尚、魏如晦の「清末四大小説家」は『小説月報』原載(中野美代子氏)といわれるが、該報には見えない。
- 5) 張泰谷重編『筆名引得』(1971, 台湾文海出版社)に拠れば、呉趼人の筆名には「呉趼人、蘭人、蘭叟、我仏山人、嶺南將叟、小允、趼、趼塵、蘭閣、應叟、偈、佛、迪齋、老上海、息影廬主、中国老少年、抽絲主人」などがあるという。尚、下線を施した筆名は、現在知見し得る作品類中に、未だその使用例を見ていないものである。
- 6) 従来魯迅の『中国小説史略』等の記述により、1867年生年説が通行していたが、ここでは劉世徳「吳沃堯的生卒年」(『光明日報』文学遺産1957. 9. 1, のち1959年人民文学出版社刊『明清小説研究論文集』収)中の考証に依拠した。

- 7) 劉氏を娶った経緯については「跖人伝」に次のようにある。「工部公（華奮）得如夫人氏劉者而賢之。顧謂家人。吾子取必劉。尋為巡檢公（允吉）取於懷來縣八里郵劉氏。如夫人兄弟之子也。」
- 8) 汪宗準等修・洗宝榦等纂『仏山忠義郷志』19巻首1巻，民国15年刊本。明代より清末に至る仏山の地理，風物，人物，文苑等について巻毎に詳細に記す。京大人文研蔵。
- 9) いま知見し得る跖人自らの手になる資料類を見ても（勿論，すべてを詳細に検討したわけではないが），曾祖父が呉榮光という高官であったにもかかわらず，跖人自身彼について何も語っていないことや，また彼自ら，己の出身を仏山と記した資料は見当らず，ただ「我仏山人」という筆名のみで仏山の名が織込まれていることは，その家系の不明な点に対する暗示ではなからうか。筆名について「跖人伝」は，他の文学史等が，跖人は幼年時代に仏山に住んだゆえ「我仏山人」と号した，とあるのとは異なり，かく号した理由を「跖人の先祖が仏山に居を卜した」ためだとのみ記しており，注意に値する。「跖人伝」の筆者，李葭榮は註1）にも述べた如く，跖人の友人でもあり，他の跖人に対する記述から推し測っても，この点には信憑性があると思われるし，実は他の文学史等の跖人の経歴に関する部分の記述も元来はこの伝に基づき書かれたものであり，それが誤伝していつのまにか「仏山に住んだ」というようにとりちがえて記述されるようになった，と考えられるからである。つまり「跖人伝」は，跖人を広東南海の人と記すものの，仏山の人とは記していないのである。そしてまた，彼の筆名「我仏山人」が，「我仏／山人」という所謂〇〇山人式の筆名ではなく，「我／仏山／人」（我は仏山の人なり）という，いわば—a play upon words—であったことにも注意する必要があるのではなからうか。それは，先に述べた榮光の子華奮以後，何らかの理由があって仏山の呉氏と関わりをもちえなかった跖人が，その筆名においてのみ，その出自を暗示させたのではないかと思われるからである（まったく想像の域を出ないのであるが）。
- 10) 跖人の生誕地を「跖人伝」は，「誕君（跖人）分宜故第」と記す。分宜とは『清史稿』地理志等の記すところに拠れば，江西省袁州府に属する県とあるが，分宜を江西省分宜県とすれば，跖人がなにゆえそこで生まれたのか，これまた不明である。
- 11) 『月月小説』第4号「跖塵詩刪贖」収。
- 12) 原本は未見。いま劉世徳「呉沃堯の生卒年」の引くところに拠る。
- 13) 『中国小説史略』第28篇「清末の譴責小説」この言は周桂笙『新菴筆記』に基づく。
- 14) 「刻画社会怪現象馳誉的呉跖人」，1963. 11 香港上海書局刊『中国歴代小説家』収。
- 15) 「跖人伝」からの引用であるが，跖人自身も「跖塵詩刪贖」（『月月小説』第7号）中に，その経緯を簡述している。また『二十年目睹之怪現狀』第108回中にも，この話が挿入されている。
- 16) 杜階平「談屑」（『小説月報』8巻1号，民国6.1収）に拠る。
- 17) 「按，跖人元字藹人。某女士為画扇，誤署藹仁。跖人喟曰“殭蚕（蚕の死んで堅くなったもの）我矣” 丞易為跖人。『藹』『跖』音同也」（孔另境『中国小説史料』1957，

古典文学出版社刊に引く『新菴筆記』)。

- 18) 尚、この頃発表した短文は殆ど散逸したらしい。だが、趺人没後、短文・雑文を收拾して冊子にしたものがおり、それらを刊行したものが『研塵筆記』や『我仏山人割記小説』だというから(汪維甫『我仏山人筆記』序)、それらの中には当然、この頃の作も数多いにちがいない。
- 19) 呉趺人の著作類については『野草』20号(1977. 8 中国文芸研究会)に、不十分乍ら「呉趺人著作目録(初稿)」として発表した。
- 20) この引用は『月月小説』第1号(1906)に『兩晋演義』を発表する際、その巻頭に附した「歴史小説総序」中の言である。これは最初の歴史小説『痛史』執筆開始よりも3年後に発表されているが、その名の示すとおり彼執筆の歴史小説の総序に当るものであって、『痛史』の執筆も勿論この観点よりなされている、と考えてよい。したがって発表の年代が逆であっても矛盾しない。(現見し得る上海文化出版社本『痛史』等は、巻頭に「総序」を附す)。
- 21) 阿英の『晚清小説史』には「痛史発表於新小説、始一卷三期(1902)、終二卷十二(1906)、共刊二十七回、未完」とある。しかし、手元の『新小説』1巻3期(univ. California 蔵本の copy)には掲載されていない。勿論、1巻1期および2期(未見だが『新民叢報』22等掲載の広告によりその内容がわかる)にも見当たらない。そうなると発表は4期以後、つまり翌1903年、光緒29年5月以後となり、阿英の記述より1年降ることになるが、そのほうが正しいと思われる。尚、詳しくは拙稿「呉趺人著作目録(初稿)」(『野草』20)の『痛史』の項を参照されたい。
- 22) 未完の原因について麦生登美江氏は「呉趺人」(『野草』12号)中で、次のように述べられるが、私も同意である。“人民の教化の手段として執筆を始めた歴史小説『兩晋演義』『雲南野集』、1903年から執筆していた『痛史』がみんな中断されたままである原因は、呉趺人が人民の教化にさえかつての情熱を失ったためではあるまいか? 阿英は「兩晋演義もまた月月小説の停刊によって中断した」と言う。『月月小説』停刊の理由が判然としないので断定はしがたいが、私は『月月小説』の停刊あるいは呉趺人の厭世観と関連があるかも知れず、だから『月月小説』の停刊に従って『兩晋演義』も中断せざるを得なかったのではないかと考える”。
- 23) 註14)に同じ。
- 24) 戈公振『中国報学史』第3章「外報創始時期」に「漢口, Central China Post(原名「楚報」)発行於1904年、英人所創弁」とある。
- 25) 反華工禁約運動の概略および関連文献については、阿英の『晚清小説史』第5章および『反美華工禁約文学集』(1960, 中華書局刊)が詳しい。
- 26) 「致曾少卿書」(『反美華工禁約文学集』巻5収)。
- 27) 『上海遊歴録』大尾に『日本遊歴録』執筆予定のことが記されていることからすれば、日本へ遊んだとのことは事実と思われる。しかし、既に『痛史』執筆期に日本へ来たという説や他の説もあり、いまのところは不明というより他はない。



- 28) 民国7年上海南園刊『上海縣統志』卷10「学校」に次のようにある。「広志小学，原名広東旅学，在祖界武昌路德里，光緒三十四年正月，広東人盧傑・吳沃堯・鮑瞻曠・郭翔等集捐創弁，改革後停弁」。
- 29 「晚清小説家吳趼人墓在宝山县發現」(『光明日報』1962. 9. 7)。

(なかじま としを)